

○ワークショップ「国際会計研究会」

開催責任者 経営学部 白木俊彦

2017年3月9日

南山大学名古屋キャンパス J棟 4階 415 会議室



ワークショップは以下のとおり、開催された。

◇報告者および題目

1. 三浦朱美（あらた監査法人公認会計士）
「IASB における基準の開発・改訂、解釈のプロセス」
2. 平野智久（福島大学経済経営学類 准教授）
「電力会社にみる資産除去債務会計の論理」
3. 角ヶ谷典幸（名古屋大学大学院経済学研究科・教授）
「IFRS 適用を巡る議論における公正価値会計の役割」

◇ワークショップの討論内容

三浦明美氏（あらた監査法人）は、「IASB における基準の開発・改訂、解釈のプロセス」というテーマで、IASB における国際財務報告基準(IFRS)の開発・改訂、解釈のプロセスにつ

いて説明した。デュープロセスハンドブックに沿った基準開発の大きな流れなどの説明を行った上で、IASB 会議における議論や基準開発がどのように行われるのかを、ロンドンのIASB に赴任され実際にご自身が担当された基準開発や改訂・起草のプロジェクトなどの例もご紹介しつつ説明され、最近の動向などについても質疑応答を通じて有益な議論がされた。

平野智久氏(福島大学)は「電力会社にみる資産除去債務会計の論理」というテーマで、電力会社における「会計」の役割について報告した。原子力発電施設の計画外廃炉に関連して制度設計された「原子力廃止関連仮勘定」について、既に発生した廃炉損失の将来への先送りであり、資産除去債務の当初認識とは形は似ていても相容れない簿記論的性格を有する点を指摘した。会場からは、複数の仮勘定を時系列で整理したほうが良い分析手法であるといった示唆があった。

角ヶ谷典幸(名古屋大学)氏は、公正価値会計が、日本におけるIFRSの強制適用を巡る議論にいかなる影響を与えてきたのかを明らかにすることを目的とした。とりわけ企業会計審議会におけるステークホルダー(学識経験者も含む。)が、いかなる論理やレトリックを用いて公正価値会計適用の賛否を表明してきたのかを明らかにされた。

検討の結果、公正価値会計はたんなる認識・測定論として取り上げられてきたのではなく、日本における製造業の重要性、財務報告と税の関係性、グローバルイゼーションの影響など、社会的経済的文脈で論じられてきたことが明らかにされた。またときに「IFRSのように公正価値会計を過度に適用すると、製造業が弱体化するので、IFRSを強制適用すべきでない」といわれることがあるが、かかる主張には十分な根拠がないこと(よってこれは一種の「公正価値神話」であること)を実証研究の結果として主張された。

以上の報告内容であったが、わが国会計基準としてそれぞれの会計の導入と実際にIFRSとして公表される過程とが関連付けられて議論され、IFRSおよび日本基準の今後の検討課題について理解が深められた。

◇研究成果発表

中山重穂、「2013年IASB『討議資料』における資産および負債の定義の検討」、国際会計研究学会年報、2014年度第1号、2015年7月。